



TITLE:

希臘神話物語(一)

AUTHOR(S):

荒木, 千里

CITATION:

荒木, 千里. 希臘神話物語(一). 天界 1925, 5(49): 54-60

ISSUE DATE:

1925-01-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/160205>

RIGHT:

希臘神話物語 (二)

荒木 千里

希臘神話は希臘人の美しい幻想が生んだ詩である。而して彼等の幻想は國家とか道德によつて少しも累されない自由なものであつたから、希臘人の神話は奔放不羈な極めて魅惑的なものである。

彼等の幻想は絶對的な無始無終の存在といふものを考へなかつた。すべてのもの、天も地も、日月火水悉く創造され、且つ人間が母親より生るゝ如く、生れたものである。神々は決して絶對無限の權力を有してゐなかつた。又神々の性質からいつても、必しも善良なもの、美しいものとは限らなかつた。神々は好んで人間の現實世界に近く徘徊してゐた。然し希臘人の幻想が奔放に活躍する爲には、神々の世界をあまりにはつきりした相に於て物語ることは不便であつた。寧ろ時と場所の判然しない薄明の世界を考へた方がよかつた。従つて神々の物語は一つの昔話の形式で語られた。然しこの昔話は桃太郎や花咲爺と違つて、彼等の現實生活に深い交渉とつよい支配力をもつてゐた爲に、彼等の生活はこれによつて詩化されたと同時に、多くの悲しき犠牲をも拂はなければならなかつた、何んとなれば薄明の世界にある神々は常に人間

世界の監視者であり時々人界に姿をあらわしてゐたからである。

希臘の神は決して圓滿具足の佛心をもつた神ではない。人間の美點をその誇張された形に於て有すると同時に、人間の缺點をも亦その誇張された形に於て具えてゐる神であつた。即ち比較的人間に近い神であつた。而もその神の威力は遙に人間を冠絶し神の眼からは人間は虫けらにも等しいものであつた。神々はよく人間に惡戯をした。人間はこれに對して唯泣寝入するより外はなかつた。然し人間が一度神威を侵すときは最も恐るべき刑罰を以つて罪せられねばならなかつた。

希臘の神々は氣紛れな、我儘な、復讐心の強い神であつたからである。希臘人の幻想の中では神の道德性はまるで問題とされてゐない。たゞ『力』がすべての最高位に位してゐたのである。美も、知恵も、力に比すれば遙に下に位してゐた。これらの神々は多く種々の自然現象によつて象徵されてゐた。思ふに、希臘人は恐畏すべき幾多の自然現象を、ある人格あるものゝ、恐らくは遙に人間よりも偉大なるある者のあらはれであると感じ、而して彼等の豊かなる空想はこれに種々の神の形と性格とをあたへ、興の趣くところ、遂に此等の神々をして様々なる悲喜劇を演ぜしめたものであらう。

星の名は多くこれら希臘の神々の名である。彼等が天空に輝く星に神の姿を見たことは、決して不思議ではない。

夜更けて靜に星空を仰ぐ時、その星の名によつて、遠く三千年の昔、希臘人の豊かな空想によつて生れた神々の面影を偲ぶことは、現在の我々に至つても、甚だ懐しいことである。私はこれからこの神々の物語りを語らうと思ふ。尤も以下に出る神は悉く星に關係のある神のみではない。これは星になつてゐる神々の性格が、星に關係のない神々との交渉の間に自づ明になるに信ずる爲である。又神々の名前は多く獨乙讀みにしておいた。

二

世の初め、天地未だわかれず、混沌たる暗黒のみが領してゐた時、そこに居たものは、カオス(混沌)、暗黒、夜、地の四人の神であつた。

暗黒は光を造つた。又暗黒は夜と結婚して晝を生んだ。地は自ら己の上を蔽ふウラノス(天)を造り、山を造り海を造つた。そして己れの子ウラノスと結婚してその妻になつた。

後世種々の神が生れ出で、來るけれども、神界に於て勢力ある神は悉くこの天地の子孫である。夜の子供なご色々あつても皆蔭役の神に過ぎなかつた。

天地の結婚によつて生れた子等は、親をも恐れない不敵な息子や息女共であつた。これを大體三種類にわけてみるに、
 (一) フンデトアルミダリーゼン **百手巨人屬** チクローベシ **二片眼巨人屬** チターネン **三巨人屬** チタニーデ **及び女巨人屬**
 等がそれである。第三の巨人屬の中では、サタン(Satanus)オツエアノヌス(Oceanus)などがよく知られて居り、チタニーデンの中ではレア(Rhea)テミス(Themis)ムネモジオーネ(Mnemosyne)フエーベ(Phoebe)テチス(Tethys)などをあけることが出来る。これらの一人一人については後で述べることにする。

これらの子等は日の光を見ることが出来なかつた。何んになれば、父なる天は彼等の生れながらに具つた恐るべき力に恐れをなして、自分より遠ける爲に、彼等が生れ落ちるや否や彼等を地の果なる地獄タルタルス(Tartarus)に幽閉してしまつたからである。

天は己の勢力の何者によつても脅さるゝのを怖れてゐたのである。

然し母親の地はタルタルスにある自分の子供の運命を嘆いて彼等の爲に復讐しやうと考へた。彼女はその勇敢なる末子サタンに一介の鎌を造つて與へた。この鎌を以つて彼サタンは父の油斷を見すまし父を去勢して仕舞つた。その時流れた血潮の滴から、後になつて神々の脅威となつた巨人達と、やさしい妖精メリエミが生れた。この妖精は鎌の柄の材料トネリコの木を植えた。

ウラノスから奪はれた子孫創造力（これを女ミ考へた）は海神の胤を宿した。そしてその海の泡から戀の女神アフロディテが生れ出でた。天ミその子の醜い争ひから美しい愛が生れてきたのである。

このサタンの叛逆によつてウラノスの勢力は全く地に墮ち天地の子等は開放され、互に結婚して各の子孫を繁殖した。就中巨人族は最も繁榮した。

ラトナ、オーロラ、ヘリオス、ルナなどはこれらの結婚によつて生れたものであり、河や泉もこの時オツエアーヌスの子ミして生れたものである。又大洋の果て、晝夜の相接するところで天を支へてゐたアトラスや、人間を造つたプロメトイスなども此時生れたオツエアーヌスの孫である。これら巨人屬の中にあつてその牛耳を握つてゐたのはサタンであつた彼は妹レアミ結婚して多くの子を生んだ。然し彼は生れる片ツ端から自分の子を食べつてしまつた。彼は自分の子に自分の勢力を奪はれるのが怖かつたのである。こゝのいふのはもうこの時分には實際の勢力を失つて只豫言者ミして辛じてその存在を認められてゐた天ミ地ミが、サタンの子供の一人は屹度サタンの天下を奪ふだらうミ豫言してゐたからである。

サタンは己れの位を脅すものはすべて恐れた。同じ自分の兄弟でも、謀反氣の多い片眼巨人族や百手巨人屬は、父親の時代ミ同じ様にタルタルスに幽閉しておいた。然し彼も矢張

り自分が父に加へた罪惡の報ひを自分自身に夢みねばならなかつた。

妻のレアは一番に彼のこの殘酷に愛憎をつかした。彼女は未人の「神ミ人間の支配者」ジュピターを生む爲に恐しい夫の眼をのがれてクレタ島に走つた。彼女は天ミ地の勧めによつてこの島の一角にジュピターを生み落すミ共に巧に子供を隠してしまつた。レアは襦袢に石を包んでサタンの許にかへつて行つたそして今度生れた子はこれですこいつてその石を呑む様に勧めた。幸にサタンはそれが石だこゝに氣がつかなかつた。

クレタ島は實際ある島である。今迄漠然ミ徘徊してゐた神話はこゝに現實の地球の一點ミむすびついたのである。

ジュピターはかくクレタ島の一角に生み落された。すべてのものは彼に親切であつた。やさしい島の住民はジュピターの泣聲がサタンの耳近響くのを打消す爲に槍ミ盾ミで喧轟な響をたて、幼い神を保護してやつた。

山羊のアマルテアはジュピターに乳を與へ、島の鳩は食物を運び、森の妖精フェアリーは守役であつた。

後日ジュピターの覇業なりし時、彼はアマルテアを星の位に上して幼き日の親切を感謝した。

かくてジュピターの發育ミ共にサタンの天下はその滅亡の日に近いて行つた。

父親の毒牙を危く脱れたのはジュピター一人ではなかつた地上に聖火をあたへたベスタ、農業の女神ツエレス、ジュピターの妻になつたユーノ、海神ネプチューン、地の神ブルト一の五人の兄妹がそれであつた。

これらの兄妹ミ相謀つてジュピターはサタン及びその一派の巨人族に戦を起した。これより先き彼は既に片眼巨人族及び百手巨人族をタルタルスから救ひ出して、その代りに彼等の有する雷神ミ電撃ミを武器として供せしむることを約してゐた。

こゝにサタンミレアより生れた新しい神々ミ、天ミ地より生れた古き神々ミの間に争覇戦が始まるのである。

三

巨人族チタイグツは叛逆の象徴である。彼等は常に叛逆し侵略せんとする荒神である。ジュピター一派の新しい神々はこれに反して先づは所謂神らしい崇拜に値する神である。従つて希臘人の幻想は勿論新しい神に勝利を歸せずには置かなかつた。

新しき神々はジュピターを隊長としてオリムプに集つた。これに對し古き神々はサタンの指揮の下にオートリスに陣を布

きこゝに戰の火蓋が切られた。

十年の長きに互つて尙勝敗の數は決すべくも見えなかつた遂にジュピターは百手巨人ミ片眼巨人族の援を乞ふた。

戦局はこゝに一變した。百手巨人は第一戰に立つてその百本の手に各岩片をつかみサタン方にむかつて投げつけ、そのひるめる隙に乘じてジュピター軍は一齊に攻撃を起した。この激戰の爲に海は荒れ狂ひ、地は嘆息し、天は悲み、オリンプの山も爲に震ひ渡つたといふ。電閃はジュピターの手より敵軍に閃きつけ、雷鳴は天地を震はし、森は焼け、海は煮えたがりその蒸氣は霧ミなつて敵軍を包んでしまつた。

かくてサタン軍は慘敗し。遂にタルタルスに追ひ込まれてしまつた。こゝにさしもの大戰も漸く終局を告げたのであるこゝに於てジュピターはサタンの舊領土を二人の兄弟ミ共に分配した。即ちジュピターは自ら天を領し、ネプチューンは海を、ブルトーは地を領した。百手巨人族はタルタルスの門衛ミなつてサタン一味の警戒の任にあたつた。

然しジュピターの天下もまだ完全に鞏固ではなかつた。地は自分の子等に對するジュピターの仕打ちを嘆き、ウラノスの血より生れた蛇足の巨人をしてその仇を取らそうこした。彼等は天に向つて岩片や木片を投げつけ、ジュピターの電閃なごは少しも怖れなかつた。然しジュピターは矢張り彼等に勝つた。即ち彼は煙を吐いてゐる海中の火山島をかついでき

て彼等巨人共のを埋め殺してしまつたのである。

地の執心は尙深かつた。彼女は龍頭を百も持つた素破らしい怪物を生んだ。この怪物の方は墨の様に眞黒であり眼には火が燃えてゐた。この怪物に打勝つことはジュピターの最も手を焼いた仕事だつたけれども結局は彼の電閃によつてこの怪物も征服されてしまつた。

かくてジュピターの王國も外部からの脅威はなくなつた。

ジュピターにもサタンによく似た性質があつた。彼も自分の子供が自分よりも強く生れることを恐れた。ある時『自分の賢い妻のメチスが(希臘の神は多妻主義であつた)ジュピターよりも力があつて母よりも賢い子供を生むだらう』といふ豫言をジュピターが聞いた時、彼はメネスがその子を生むことを恐れて、彼女に代つてジュピター自らその子を生むので生んだ。これによつて豫言的中を防ぐことが出来たのである。その娘の子がミネルバであつた。彼女は父親から生れ出す時既に甲冑を身につけてゐたのに相應しく、非常に戦争の好きな女傑であつた。而して母親より生れなかつた彼女は、彼女が身につけてゐる甲冑の鋼鐵の様に、冷い心をもつてゐた。

ジュピターのかゝる心配はも一ツあつた。彼はテチスと結婚し様と思つた。然し彼がもし彼女と結婚すれば、彼自身よりも強い子供が生れるぞと豫言された時、彼は恐れをなして

二〇

その結婚を思ひ止つた。テチスは神々の勧めによつて身を下してペレウス王と結婚した。果して豫言の通り生れた子のアヒレスは父のペレウス王よりも力の強い男になつた。

餘談にわたるけれどもアヒレスが生れるに母親は彼の足踵を握つてスチックス(三途川といふ様な神話的な川の名)に逆しまにズブリに浸した。それによつて彼は踵を除いた他の全身決して傷のつかない身體になつた。その足踵に彼はトロヤの戦の時に致命的の傷を負ふた。

ジュピターの天下も最早や漸く内外の憂なき堅固なものになつた。

一方失脚した彼のサタンはさうなつたらう。彼はタルタルスに永劫に蟄居してゐなくてはならなかつたらうか。否決してそうではなかつた。ジュピターとの戦に於て己の破壊的權威をすっかりなくしてしまつたサタンは、こゝに心を變へてやさしい善良なる神にかわつた。彼は一夜ひそかにタルタルスを逃れ出で、チベル河に舟を泛べて下り、ラチウムに住む友ヤヌスの家を訪れ、彼と協力して人間の感化事業に志し、彼の智と徳とは遂にこの地に黄金時代を造るに至つた。ラチウムの地は四方山に圍まれて、よくジュピター一派の神々の眼からまぬかれる事が出来た。

このサタンの黄金時代は希臘人の民謡に歌はれて、逃れ去つた善き日として、今にかへす由もなき幸福なる時代として

憧憬されたものである。

傳へ聞くところによれば、ローマの丘陵の上に昔、サツルニア(Saturnia)なる美しい街があつたといふ。この街は彼サタンの黄金時代の名残りであつて、サタンの名によつて名付けられた街であり、而して現今のローマ市の前身であるといふ。

四

ジュピターを盟主とする新しい神々の天下は景後迄何者によつても覆されなかつた。然し順序として私は巨人族の神々についても、少しく物語るべきであらうが、あまりに紙数の費されることを恐れて、たゞオーロラ一人について書くに止めよう。

オーロラは天地の孫娘であら。多くの舊神がジュピターの代りなつて亡んで行つた中に、オーロラはいつ迄もこのまゝの美しさ若さを以て輝いてゐた。彼女は舊神の一人アストロイスと結婚して、烈風と曉の明星とを生んだ。彼女は馬車をあやつりながら、朝早く薔薇色の指先に夜の薄夜を拂つて、薄暗き空氣の間より暫時人間を照し、再び朝暾の輝く

前に何處ともなく消えて行くのである。彼女の夫は世の代るに共に亡んでしまつた。そして幾年かの後彼女の美しい戀物語が始つた。

トロヤ王ラオメドンの皇子にチトームスと云ふ美しい若者があつた。オーロラは彼を一目見るに怪しくも心動き、そのまゝチトームスを連れ去つてしまつた。彼は然し人間であつた。年くればやがて死すべき人間であつた。オーロラは自分の戀の爲にジュピターに彼の命に永久に死せざらむことを乞ふた。そしてその乞は許された。彼等は幸福であつた。オーロラは毎朝チトームスの床から天上に上つて、下界を照してゐた。彼等の間には一人の男の子が生れた。然しこの子には不死は許されなかつた。彼の死後、彼の爲に優しくも建てられた金の塔は、朝な朝な太陽がこの塔を照す時に、朗らかに鳴り響いたといふ。

チトームスの幸福は然し不完全であつた。オーロラは彼の不死を乞ふに共に彼の不老を願ふことを忘れてゐたのであつた。

かくてオーロラの戀人の若々しい肉體からは、次第に豐満さ力さが失はれて行つて、やがて老衰の影が深く刻まるに至つた。遂に糸の如く細つた彼はかすれた聲以外には、その存在を認めることが出来ぬ程になつてしまつた。

彼は遂にオーロラに乞ふた。「さうそもこの人間に歸してく

れ。そしてこの身體を死なしてくれ。こうして生きて居るより死んで仕舞つた方がいくらましだか知れないから」ミ。然しそれは一旦不死になつた身ミして無理な願に相違なかつた希臘の詩人は云ふ「完全な幸福なんてあるもんじやない。いや決してあるものか。若いアヒレスは早く死んで仕舞ふし、美しかつたチトーヌスは長い／＼こゝに掛つて干枯びて、それで死ねずに苦しんで居るのだからナ」。

又ある一説によるミチトーヌスは蟬になつたミいふこゝである。(續)

註

○ウラノス ハーシエルがはじめて木星の外に一つの遊星あるを發見した時に、これをウラノスミ名づけた。ウラノス神の名を冠した星がそれまでなかつたからである。ウラノスを譯して日本語では天王星ミ言ふ。

○サタン(サトルヌス)英語の惡魔ミ言ふ字はこれから出たもの。サタンは土星である。ガリレオがはじめて土星を觀測した時その兩側に小さな二つの星の様なものがあるのを見た。今日のリングである。それがみる度に色々の形がかわる。或る場合にはなくなつたりする。當時の人がサ

三

タンがてつきり自分の子供達を食つてしまふのであるミ考へたのも無理ない事である。

○オツエアヌス 英語のオセアン。大洋の事。即大洋を司る神である。

○アトラス 地圖の事をアトラスミ言ふ。アトラスが地球を支へてゐる圖は讀者のよく知つてゐる有名な彫刻である。

○アフロディーテはヴィーナスの別名ヴィーナスは金星の名に思ひられてゐる。

○ジュピターは遊星中最も大きな木星の名になつてゐる。

○子ブチューン ルベリエ及ガルレによつて天王星の外に更に遊星あるを發見された時にその名をネプチューンミ名づけた。即海王星である。

○ミテルバは學問を司る女神である。

○曉の明星、昔の人は曉の明星ミ宵の明星ミは全然別物であるミ考へてゐた。

○オーロラは今日普通北極光の事であるが、こゝで言ふオーロラは夜明前の薄明の事である。

ノルトン星圖が數部ありますから希望者は事務室へ(價格六圓七拾五錢) 送料十二錢